

公開講演会要旨

いわゆる忍冬唐草紋について——法隆寺式軒平瓦の紋様を中心にして—— 法隆寺式と呼ばれる軒平瓦の主紋である忍冬唐草紋は、同寺の仏像光背や玉虫厨子、灌頂幡の飾金具など処々に見える。忍冬とはすいかづら Honeysuckle に由来するギリシア起源の植物紋であるという説が一時有力だったが、しだいにパルメット説に傾いてきた。法隆寺式軒平瓦の紋様を検討した結果、最も古式の東院下層出土のものから西院創建瓦を経て徐々に変化しており、その変化は中心飾りおよび結節部の蕾の有無などにおいて著しい。中心飾りは当初円相で出現し、上部に火焰形をいただく。これを中国・朝鮮などの諸例と比較し、忍冬唐草紋の中心飾りは蓮華座にのった火焰宝珠であり、左右に反転する唐草は蓮華の側面観を表わしたものであることを明らかにした。忍冬唐草紋とは蓮華唐草紋なのであった。(山本忠尚)

近世大和における町人地の形成過程 近世における都市計画に関する史的考察の一環として、今井と大和郡山を例に町人地の形成過程を追跡し、計画的町割を施された地区における町割・敷地割のあり方について分析を試みた。今井は、天文年間に成立したといわれる寺内町的性格の強い在郷町であり、町の中央部の町割は本町筋を基準に整然と施されている。また、大和郡山は、天正13年の羽柴秀長の入部とともに建設された城下町で、城の東南の平坦地に位置する町人地の北半には極めて計画的な町割が施されている。両者は、成立事情を異にするものの今なお遺存する街路網や水路網等のあり方に共通する点も多い。こうした当時のいわば都市計画の一端を現地調査及び史料をもとに検討した。(亀井伸雄)

古代造瓦技術に関する一考察——凸面布目平瓦を中心として—— わが国の平瓦製作技術は桶巻き作りに始まるが、奈良時代になると独自の凸形台一枚作りに変化する。しかし、二・三の新技法が7世紀後半に試みられ、この時期の一枚作りへの過渡期とされている。凸面布目平瓦もその一つであるが、その作り方については、凸形台一枚作り・凹形台一枚作り・桶巻き作りの三つの説が従来唱えられてきた。今回は奈良県川原寺出土例に残る痕跡の観察に基づき、桶の実大模型を作製して技法の復原を試みた。その結果、桶の凹面に布を紐で綴じつけ、展開状態の桶に粘土板を巻きつける「桶内巻き作り」である可能性が強いことを指摘し、凸形台一枚作りへと直接つながる技法ではないことを明らかにした。(大脇 潔)

古代の建造物修造技法 奈良時代の現存遺構には移築されたもの、古材が転用されたものが少なくない。石山寺造営にも再利用がさかんに行なわれた。これらの実例や記録にみられる内容は、ほぼそのままの移築から、増改築あるいは用途の変更など幅広いが、まことに巧妙に行なわれ、古材の再利用も徹底し、移築・再利用は古代にも一般的な手法であったと考えられる。なお、平安時代初頭頃に当麻寺曼荼羅堂前身建物に古材として転用された建物は、奈良時代の宮殿・官衙に属する掘立柱・檜皮葺の建物で、記録によって復原される藤原豊成板殿とともに檜皮葺及び板葺の掘立柱建物の構造手法を示す重要な事例である。(岡田英男)